Momoyama Gakuin University

〔共同研究：現代演劇研究——英米の演劇を中心として〕

現代演劇の展望

日　下　隆　平*
宮　本　孝　二**
石　塚　浩　司***
小　野　良　子****

第1章　W.B.イェイツと挿絵画家
——イェイツとデュラック——

日下　隆平

W.B.イェイツが初期の詩劇を上演するさい，舞台美術家，とりわけ背景画家の存在は重要だった。その多くは主として世紀末からラファエル前派運動の影響を受けて登場してきた挿絵画家たちであった。厳密には，挿絵とは本の解説と装飾を兼ねるものであったように，劇の背景画(Backdrop)は劇にリアリティとある種の雰囲気を生みだす効果があった。とはいえ，彼らを舞台美術家としてイェイツが採用したのは，彼らの挿絵の性質がイェイツの詩劇に適したからであると考えられる。彼らの挿絵の特徴には，空想的・幻想的要素があったこと，さらには当時のジャポニスムの影響からオリエント的なものへの関心が強かったことなどが，イェイツの詩劇のイメージ作成に結びついたといえる。このような点からすると，読者からみて背景画の変化を知ることは，作品の展開を知ることにも繫がることになると同時に，作家からいえば挿絵画家の演出が自分の意図せぬ局面を新たにもたらす可能性も秘めていたわけである。

世紀末の挿絵画家ウォルタークレインは『書物と装飾』のなかで，ギュスターヴ・ドレ(1832－1883)の挿絵に演劇的な風景(scenic effect)があることを認め，それがSir Henry lrvingの劇に思わぬ影響を与えたことを述べている。こうした機能を考慮すれば，挿絵画家の形象作成能力は時として作家に少なからぬ影響を与えることがあると考えられる。事実イェイツの作品は1913年を境に新たな展開をみせた。以上の観点から，本論は挿絵画家とイェイツとの係わりを中心に，詩や劇のイメージが展開するプロセスをみようとするものである。

この論文は，挿絵画家とイェイツとの係わりの中から詩や劇のイメージが変化する過程を検討していったものである。先ずラファエル前派の特徴である幻想的・空想的挿絵(Fairy painting)の系譜について探り，その<夢の風景>と『ルーバイヤート』的な特徴をイェイツの作品のなかで検討していった。つぎにクレイグまでの舞台の背景画とデュラックの演出とを「絵画から彫刻的イメージへ」という比喩でとらえ，イェイツの作品への具体化を辿っていった。

その結果として，1824年のアンデルセンやグリム童話の翻訳に起源を持つ妖精絵画はイェイツの舞台背景と繫がるものであることがいえよう。ラファエル前派の特徴のなかで，<夢の風景>とオリエントへの関心は，形式は異なるが，デュラックの演出でもはっきり窺われる要素であることが検討できた。さらに，新たな様式の劇を生みだしたことによって，その後の詩においても彫刻的形象がみられるようになったことを何編かの詩によって確認できたと思う。そこでデュラックが果たした意義は大きい。

*　本学文学部
**　本学社会学部
***　本学文学部
****　本学文学部

NII-Electronic Library Service